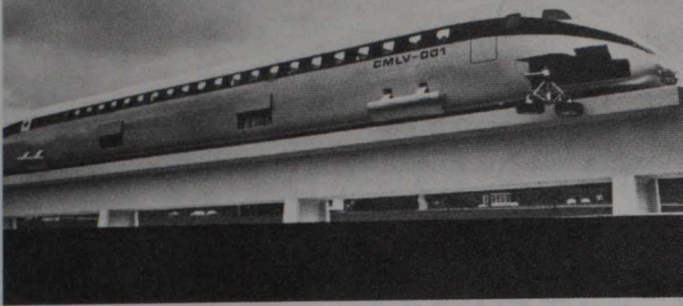


カナダ人の 発明発見 (XIII)

● リニア・モーター・カー

モントリオールにある連邦政府の輸送開発センターでは、一九七一年以来、磁気浮上車（マグレブ MAGLEV）と都市間輸送におけるその可能性について研究しているが、最近の見通しによると、この技術を利用した高速列車（HST 写真）がカナダでも今世紀中には実現しそうだという。



国立科学研究所で開発したマグレブは、翼と足、エンジンを取り去ったDC-9機に似ており、高架の軌道の上を最高時速四五〇キロで走る。

オンタリオ州キングストンのクイーンズ大学にあるカナダ誘導地表輸送研究所では、トロント、オタワ、ミラベル（国際空港）、モントリオールをマグレブで結ぶ場合の経済的可能性を検討した結果、高架軌道の建設にはおよそ三十億ドルかかるが、それでもじゅうぶん採算はとれるし、航空輸送よりも

安くつく、との結論をだしている。

ミラベル空港からモントリオール、アルバニー（米ニューヨーク州）をへて、ニューヨーク市までのマグレブ運行も検討されている。これが実現すると、モントリオール市内からニューヨーク市内まで二時間以内で行けることになり、所要時間が飛行機より大幅に短縮されるだけでなく、とても便利になる。

● サブ・イグルー

イグルーといえば、かつてエスキモーが住んでいた氷の家だが、これはアクリル製の半球を合わせて作った海底の家。

一九六九年にカナダの医師がダイバーでもあるジョセフ・マッキニスが開発したこのサブ・イグルーは、四方八方が見渡せるだけでなく、海水でもサビつかない。内圧が外部の水圧と等しくなるように空気を送り込むと、地上における探検者のテントと同じく、ダイバーたちの休息および行動拠点となる。

サブ・イグルーは、一九七二年十一月、北極圏から六百キロ北にあるレゾルト近海で強度や、住み心地がテストされた。極地の水海下に人間の乗った「基地」が設置されたのは、これが初めてである。実験は成功し、ダイバーたちは七、八時間も北極海の底で活動することができた。

● カナダ式ボウリング

日本ではボウリングのピンの数は十本、

というのが常識だが、カナダでは五本が普通。

ファイブ・ピン・ボウリングは、カナダで生まれ、カナダで育ったゲームだ。話は一九〇四年にさかのぼる。ホテル、劇場、競馬など、幅広く事業を手がけていたトロントのトミー・ライアンは、その年、ボウリング場を開設した。金持ちの事業家たちがだんだん集まるようになってきたが、思わぬ問題が待ち構えていた。まず、その頃の昼食時間は三十分が普通だったため、テン・ピンのゲームでは長くかかりすぎた。それに十六ポンドもするボールを持ち運びするのは、いかにも不便。

そこでライアンはもっと簡単にできるボウリングを思いついた。ボールの重さをわずか三・五ポンド（約一・五キロ）にして、お客が持ち運ばなくてもすむように、ボウリング場にいくつも用意したのである。もちろん、ピンも小さくした。そしてピンが飛びはねないように、ライアンはピンの中央部にゴム輪をはめた。

テン・ピンのボウリングと比べて時間が短縮され、あまり力もいらなくなったため、それからは女性の愛好者もふえた。そしてボウリング場がトロントのあちこちにできた。

現在、ボウリング人口はカナダの参加スポーツの中で一番大きい。リーグ戦に参加する競技人口はおよそ八十九万人で、そのうち六十万人はファイブ・ピン・ボウラーだ。

編集後記

○大使館——というところ、何か近づきたいイメージがあるようです。どういった担当があつて、それぞれどういう仕事をしているのか、知らない人も少なくありません。

○スペースの制約もあつて、はたしてカナダ大使館のスタッフやそれぞれの仕事をきちんとご紹介できたかどうか、あまり自信はありません。当大使館を利用する上で、またさまざまな分野における日加間の結びつきを理解する上でお役に立てば幸いです。

○カナダの憲法問題（トピックス欄参照）に解決のメドがつかしました。本号がお手元に届く頃には、自主憲法制定へ向けてさらに進展していることと思えます。カナダはこれで新しい時代を迎えることになります。（吉田）

本紙中の意見や見解は、必ずしもカナダ政府またはカナダ大使館の考え方を反映するものではありません。また公式文書の翻訳は仮訳です。転載の際は、できるだけ出典を明らかにして下さい。ご意見やご希望は左記の住所にご連絡下さい。

〒100東京都港区赤坂七丁目三三三八

カナダ大使館広報部